南都の発掘調査　-近鉄奈良駅前に眠る奈良1,300年間の歴史-

日々観光客で賑わう近鉄奈良駅前では、多くの方々が世界遺産の興福寺や東大寺、春日大社へ向け東へ歩んでゆきます。この駅前周辺の地中には、これら世界遺産とともに歩んできた人々の遺跡が眠っています。近年この一帯で行われた、発掘調査の成果を紹介します。

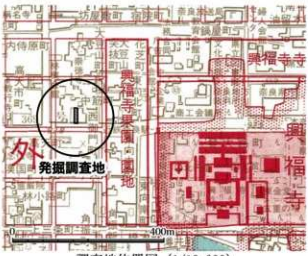
平城京から南都へ、そして奈良へ

平城京の時代　奈良に都が移ってきた時、調査地は、興福寺を含めた平城京外京として街区が築かれます。調査地内では、現地表下約1.4mで奈良時代の東西方向の溝が見つかっています。溝は幅約4.5m、深さ約0.6mで、奈良時代の土師器・須恵器が出土しました。柱穴は見つかりませんでしたが、周辺の調査では一辺0.5～0.6mの柱穴を確認しており、中小規模の掘立柱建物があったようです。

南都の時代　都が長岡京・平安京に移った後も、調査地周辺は興福寺の周辺に広がる街区をなしていたようです。京都の朝廷に強訴を繰り返した「南都北嶺」の「南都」興福寺を中心とした新たな町の時代です。

調査地では、部分的に平安時代中頃の整地層があり、その上に厚さ約0.2mの平安時代後半の整地土があります。現地表下約1.2mのこの上面からは、平安時代後半～鎌倉時代の遺構が見つかります。径約0.3mの小柱穴が多数あり、建物が何度も建て替えられたことがわかります。また当時のゴミ穴からは、多数の土器（土師器・瓦器）が出土しています。ほぼ完全な形で出土するこれらの土器は、使い捨ての容器と考えられ、当時の神事や仏事に用いられた後に廃棄されたものと思われます。

平城京跡・奈良町遺跡　西御門町



調査地位置図（1/10,000）

西御門町発掘現場の全景写真（北から）

左から奈良時代・平安時代後半・江戸時代で、徐々に遺構面が高くなってゆくことがわかります。

奈良町の時代　江戸時代には、興福寺から江戸幕府に支配が移り、奈良奉行所が北魚屋町西町（現在の奈良女子大学）に設けられ、直轄地として奈良の町を支配しました。町の領域が決まり現在の街区が確立します。

調査地では、現地表下約 0.6 m で江戸時代初めの地面が、現地表下約 0.3 m で江戸時代後半の地面が見つかっています。この時期には、掘立柱建物から礎石建物に変化した結果、建物遺構は確認出来ていません。ゴミ穴からは引き続き多くの遺物が出土します。大多数は日用品の食器類で、土師器皿も引き続き出土しています。

南都を掘る　奈良の市街地での発掘調査では、このように重層的に埋もれた遺跡を、上から順に各時代ごとに検出・掘削と記録を繰り返し行います。下の遺跡を調査する場合は、当然上の遺跡を破壊し掘り進めなければなりません。遺構・遺物の見逃しや掘り忘れに注意しながら、慎重に発掘調査は進められます。

西御門町発掘現場の土層と、出土遺物の対応

南都の歴史を物語る品々

発掘調査では多種多様な遺物が出土しますが、ほとんどは土器や瓦類の焼き物です。焼き物は土中でも腐らず、ほぼ廃棄された当時のまま出土します。遺跡の年代を知る上で、貴重な遺物の一つです。

南都を特徴付ける出土遺物として、土師器皿があります。土師器皿は奈良時代以降一貫して、素焼きで、ロクロを用いず手びねりで形を作り出します。素朴な形ですが、形・作り方・色などから各時代による型式変化が読み取れます。同じ製作技術のもと、奈良から江戸時代まで土器を作り続ける地域は全国的にもまれです。同様な地域には、平安京・京都があります。南都の土師器皿は京都と同様な型式変化が見られます。京都の朝廷や貴族の子弟が南都の寺社に下る例などから、土器も京都の影響下にあるものと思われます。

江戸時代の土器類

土師器は前代より出土量は減少しますが、代わって国産の陶磁器が増加します。肥前（佐賀県）産の磁器（伊万里）や信楽産の陶器が主体となります。

平安時代後半土器類

土師器は大小の皿と煮炊き用の羽釜が基本セットとなります。新たに瓦器椀が現れ、この時代を代表する遺物となります。

平安時代中頃の土器類

土師器の食器は皿のみとなり、器壁が薄く作られます。須恵器は出土量が減り、新たに釉薬をかけた灰釉陶器などが現れます。

奈良時代の土器類

土師器・須恵器の素焼きの焼き物が大半です。土師器には杯などの食器類と煮炊き用の甕、須恵器は食器類の他貯蔵用に壺があります。